

大学院リサイタルシリーズ⑦

秋の調べ

2020年 10月 17日(土) 11:00 開演(10:30開場)

洗足学園音楽大学 シルバーマウンテン 1F

プログラム

1. 持田 夏希 (オーボエ) Pf 星野 苗緒
オーボエとピアノのためのソナタ/フランシス・プーランク
サロンのための小品/ヨハン・ヴェンツェル・カリヴォダ
2. 後藤 ゆずか (声楽) Pf 皆川 純一
《6つのアリエッタ》より/V.ベッリーニ
第1曲 優しい妖精、マリンコニアよ / Malinconia, Ninfa gentile
第2曲 お行き、幸運なバラよ / Vanne, o rosa fortunata
第4曲 せめて、私にかなわぬなら / Almen se non poss'io
第5曲 どうぞ、愛しい人よ / Per pietà, bell'idol mio
第6曲 喜ばせてあげて / Ma rendi pur contento
歌劇《カプレーティ家とモンテッキ家》/V.ベッリーニ
あぁ、幾度か / Oh! quante volte, oh! quante
3. 三輪 桃子 (オーボエ) Pf 星野 苗緒
シューマン / 幻想曲集 Op.73
ポンキエッリ/カプリッチョ

△新型コロナウイルス感染症の感染拡大を防ぐためのお願い

- ・マスク着用の徹底、こまめな手指消毒・手洗い・咳エチケットの励行にご協力ください。
- ・大声や対面での会話はお控えください。
- ・演奏者への声援はご遠慮いただき、拍手のみとしてください。
- ・休憩時、終演後はスタッフが扉を開けるまでお待ちいただき、空いているドアから混雑を避けて入退場してください。
- ・客席内やロビーでのご飲食はお控えください。
- ・出演者への面会はできません。出演者への花束・プレゼントもご遠慮ください。
- ・万一、集団感染の発生が明らかになった際は、保健所に入場者の情報を提供する場合がございます。

■ 曲目解説

《オーボエとピアノのためのソナタ》

FP.185 は F.ブーランクが 1962 年に作曲したものであり、彼の死の 1 年前に書かれた最後の作品である。また、作品の初期スケッチのタイトルページには、献呈文として「プロコフィエフの思い出に」と記されている。今回演奏するオーボエ・ソナタは、1957 年の春にフルート・ソナタを書き上げる頃から構想されていた、各木管楽器のためのソナタを作曲するという計画のもと、作曲を予定していた。

第 1 楽章エレジー（穏やかに）は、短いオーボエのソロで始まり、伸びやかで穏やかな旋律とピアノの和音によるアタックとの対比が成されている。第 2 楽章スケルツォ（動的に）は、オーボエとピアノのたたみかけるような連打音が特徴的である。第 3 楽章デブラシオン（嘆き）は、オーボエソロを挟みつつ長調と短調の間を揺れ動きながら展開し、最後は死に絶えるように静かに終わる。この楽章は 1962 年 7 月 14 日付の書簡の中で「典礼の歌に近いものを」と記されており、宗教的な色彩も感じられる。全 3 楽章で構成されており、「緩急緩」となっているが、姉妹作であるクラリネット・ソナタの「急緩急」とは逆の形をとっている。

《サロンのための小品》

ヨハン・ヴェンツェル・カリヴォダは、ドイツで活躍したボヘミア出身の作曲家・ヴァイオリニストである。彼は 10 歳の時に新設されたブラハ音楽院で作曲とヴァイオリンを学んだ後、1822 からはフェルテンベルクの宮廷から招きを受けてドナウエッシングの宮廷指揮者を務めた。多作家で、作品番号のあるものだけで 243 に達し、その他に出版されたものが 44 曲あるほか、数多くの作品が手稿譜として残っている。この作品は当時の技巧的な管楽器作品の典型ともいえるヴィルトーソ・ピースである。ト短調の導入部から始まり、ト長調で提示されるパラフレーズが続き、最後は導入部の主題の回帰を経て、華やかなコーダで終わる。

《6 つのアリエッタ》より

ベッリーニは、ドニゼッティ、ロッシーニと並んで 19 世紀のイタリアベルカント・オペラを代表する作曲家である。

〈優しい妖精、マリコンニアよ〉は、"哀愁と言う名の妖精に、私の人生を捧げよう"と歌っている。agitato からは、激しく想いを寄せていることがわかる。

〈お行き、幸運なバラよ〉は、実らぬ恋を嘆いている曲だが、メロディは明るく幸せそうである。しかし、運命を羨んでいる場面では付点 8 分音符と 16 分音符で、心情の揺らぎを表している。

〈せめて、私にかなわぬなら〉は、"愛する人について行くことができないのなら"と、涙を流しながら歌っている曲である。叫びの象徴と言われている短 6 度の跳躍(特にラ-ファ)が、raccolti amor(集めた愛)に付けられている。

〈どうぞ、愛しい人よ〉は、切に訴えるメロディが特徴の曲である。曲の第一声が"お願いだ"と悲嘆に満ちた叫びから、"私は不幸で不運である"と一気に歌い上げている。長調になる箇所も、心の揺れは変わらず、自分を納得させているようだ。

〈喜ばせてあげて〉は、まるで夢の中に誘われるような前奏から歌が始まる。後半の歌詞で"苦悩"や"恐れ"という所に、他の調の和音が使われていて、言葉だけでは無く音からも辛さを感じさせられる。終盤では"私の心は想い人の中で生きている"と繰り返し口にし、自分の心を落ち着かせるように終えている。

《カプレーティ家とモンテッキ家》

1830 年ヴェネツィアで初演された。台本はフェリーチェ・ロマーニによるものである。

13 世紀のイタリア・ヴェローナで敵対しているカプレーティ家の娘ジュリエッタと、モンテッキ家の若き当主ロメーオの悲恋の歌劇である。ジュリエッタの登場の場面で歌われる〈ああ、幾度か〉は、望まない結婚への悲しみと、ロメーオへの愛を歌っている。レチタティーヴォはピアノとの掛け合いが美しくも儚く、長調になるほどジュリエッタの悲しみの深さをあらわしている。"この嘆きをどこに届ければいいの?"と歌う場面は魅力的である。アリアは哀愁が漂い、ロメーオのことを想いながら歌われ、太陽の輝きや、自分の周りに吹くそよ風でさえも、愛する彼のように感じられるジュリエッタの悲哀さは、とても印象的で心に残る。

《幻想曲集 Op.73》

ロベルト・シューマンはドイツのロマン派を代表する作曲家である。クラリネットとピアノのための室内楽曲として作曲されたが、チェロやヴァイオリンでも度々演奏される。

静かで表情豊かに歌う第 1 楽章は、悲愴的な感情の起伏を表す半音の進行が多様されており、イ短調で進行していく。しかし対照的に度々へ長調が顔を覗かせ、甘美な旋律が続く。

第 1 楽章の悲愴的で甘美な旋律とは異なり、ピアノから独奏楽器へと受け継がれる動きのある軽快な旋律が、この第 2 楽章のテーマと言えよう。中間部では、ピアノと独奏楽器との掛け合いが楽しい装飾により軽快さが増していく。そして、再び旋律が提示され「少しずつ静かに」と指示されたコーダへと受け継がれ第 3 楽章へ向かう。

急速に、燃えるようにと指示される勢いのある第 3 楽章は、冒頭から活気に満ち、緊迫感さえ感じられるような旋律が度々演奏される。しかし、中間部では一転し、哀愁漂う第一楽章を彷彿とさせるかのような旋律で曲が進行していく。そして、活気溢れる旋律に戻り、華やかに曲の終末へ向かう。

《カプリッチョ》

アミルカーレ・ボンキエッリはシューマンと同じくロマン派の作曲家である。オペラを主に作曲したことで有名で、オペラ《ジョコンダ》が一番の代表作となり頻繁に演奏される。《カプリッチョ》もオペラの歌曲のような要素が多様されている。

ピアノの哀愁漂うテーマから始まり、徐々に盛り上がりを見せオーボエの劇的な演奏が始まる。緊張や心情の揺れ動きを表す半音階的進行が至る所で演奏され、叙情的に曲が進行していく。冒頭の曲想とは異なり、可愛らしくまるで歌うかのように進行していく中間部を経て、輝かしい曲の終末へと向かう。楽章のない単一楽章の曲ではあるが、オペラのように場面が目まぐるしく変わっていくところがこの楽曲の面白さであり素晴らしさと言えるだろう。

■プロフィール

持田 夏希 オーボエ

神奈川県出身。洗足学園音楽大学管楽器コースオーボエ専攻を卒業。13歳よりオーボエを始める。フィリップ・トンドゥル氏のマスタークラスを受講。これまでにオーボエを佐藤亮一、辻功の各氏に師事、室内楽を菅井春恵、辻功の各氏に師事。

後藤 ゆずか 声楽

宮城県出身。洗足学園音楽大学声楽コース卒業。

2017年 様々な障害ある人ない人による演劇祭「チャレフェス演劇祭」にチャレフェス歌劇団として出演。

2018年 多摩美術大学コラボオペラ「魔笛」(日本語上演)で童子Iを演じる。

音楽大学在学学生、卒業生による混声合唱団"カンマーコール"として数々の演奏会に出演。

これまでに捻金正雄、大井範子の各氏に師事。

女声合唱団"ゆめの缶詰"所属。

三輪 桃子 オーボエ

東京都出身。12歳よりオーボエを始める。JBA管打楽器ソロコンテスト第3位受賞。その後、関東甲信越支部大会優秀賞受賞。東海大学菅生高校卒業。洗足学園音楽大学在学中ラ・フォル・ジュルネ・オ・ジャパンに出演。フィリップ・トンドゥル氏のマスタークラスを受講。

これまでに、オーボエを辻功、佐藤亮一、倉田悦子の各氏に師事、室内楽を辻功、岩花秀文、西脇千花、星野均の各氏に師事。